

『源氏物語』を紡ぐことば

——紅葉賀卷の藤壺描写から——

植田恭代

【源氏物語】紅葉賀卷の藤壺をめぐる物語は、一見さりげない本文のようでありながら、実は巧みにそれぞれのことばの持ち味を掬い上げて紡ぎ出されていることにはしばしば驚かされる。たとえば、不義の子を出産した藤壺が厳しい局面に対峙しつつかえって強く自らの人生を切りひらいていく場面の物語本文は、この斬新な藤壺造型を描くにふさわしいことばによっている。

二月二十余日のほどに、男皇子生まれたまひぬれば、なごりなく内裏にも宮人も喜びきこえたまふ。命長くもと思はずは心憂けれど、弘徽殿などのうけはしげにのたまふと聞きしを、空しく聞きなしたまはましかば人笑はれにや、と思しつよりてなむ、やうやうすこしづつさはやいたまひける。

紅葉賀卷 三三五頁¹⁾

周囲の喜びに藤壺はますます苦悩を深めるが、弘徽殿女御ののろわしげなことばを仄聞き、それを契機として「人笑はれ」になどなるまいとかえって心を強く持ち、次第に気分も快復していく。風評

などにも屈せぬ藤壺のこの描写は、物語の女性たちにはしばしば用いられるキーワード「人笑はれ」への着目から、藤壺造型の転換点とも見なされることが指摘されてきた²⁾。先覚に導かれて、「人笑はれ」を受け本文のことばをあらためて調べてみると、「思しつよる」も「さはやく」も『源氏物語』以前から常用されてきた語ではなく、ここには斬新な印象の散文のことばが選びとられている³⁾。

華麗な青海波の舞で始まる『源氏物語』紅葉賀卷は、その華やかさゆえに禁忌の恋による光源氏と藤壺女御の苦衷を浮かび上がらせ、皇子誕生という不穏な状況を強く生き抜く藤壺を、相応のことばによって的確に描出している。

そうした観点から続く物語場面を顧みると、四月の皇子参内場面で詠まれる藤壺の和歌にも、また、それぞれの持ち味を生かしたことばの選ばれ方がうかがえる。

皇子誕生を喜ぶ桐壺帝にまみえ、動揺する光源氏と恐懼する藤壺の詠み交わす和歌である。

よそへつつ見るに心は慰まで露けさまさるなでしこの花

花に咲かなんと思ひたまへしも、かひなき世にはべりければ」
とあり。さりぬべき隙にやありけむ、ご覧せさせて、「ただ塵
ばかり、この花びらに」と聞こゆるを、わが御心にも、ものい
とあはれに思し知らるるほどにて、

袖ぬるる露のゆかりと思ふにもなほうとまれぬやまとなで

しこ

とばかり、ほのかに書きさしたるやうなるを、喜びながら奉れ
る、例のことなれば、しるしあらじかしとくづほれてながめ臥
したまへるに、胸うちさわわぎていみじくうれしきにも涙落ちぬ。

紅葉賀卷三三〇～三三一頁

前裁の常夏の花に寄せて光源氏の贈歌に「なでしこ」が詠み込ま
れ、それを受けて藤壺の「袖ぬるる」の返歌がある。

この藤壺の和歌は、『源氏物語』の研究史において繰り返し言及
されてきた一首である。四句の「なほうとまれぬ」が、「疎まれて
しまう」という完了の助動詞「ぬ」の終止形による表現なのか、打
ち消しの助動詞「ず」の連体形によって「疎むことができない」と
いう意味を表すのか。この「ぬ」の解釈をめぐって、旧注以来、解
釈が分かれ問題となってきた。九条植通『孟津抄』は完了説を示し、
本居宣長『源氏物語玉の小櫛』や萩原広道『源氏物語評釈』は打ち
消し説をとる。近年の注釈書では完了説を採用する傾向にあるが、
現在も両説をめぐって論議は重ねられ、両説の意味がかかるとする
解釈も出されている。⁵⁾

論議を呼び続ける問題については別に考察の機会を期したくひと
まずおいて、ここでは藤壺の心情が託される一首を、和歌のことば
としてのあり方からいま一度ながめてみたい。

この藤壺の一首を構成する語句は、歌語の伝統のうえにあること
ばという観点からあらためてたどりみると、必ずしも等し並みにみ
なせるわけではない。

初句の「袖ぬるる」からみてみたい。涙で袖を濡らすというのは
古典文学によくある表わし方であるけれども、「袖ぬるる」に限っ
てみるとこれは『源氏物語』の時代に定着していた歌語ではない。
勅撰集の用例は『新勅撰和歌集』までくんだり、平安私家集の用例が
わずかに確認されるくらいである。⁶⁾

袖ぬるるゆきまをわけてしのぶ草かたみのこもにつみ入れつ
るかな

『中務集』二八七

袖濡るる荒磯浪と知りながらともにかづきをせしぞこひしき

『更級日記』⁷⁾

『中務集』は「ためもとしばちのもとへ、十二首」とある六首目。
『更級日記』の用例は気の合う友に送った作者の和歌。おそらく『源
氏物語』の藤壺詠ゆえに、後の和歌にも詠まれるようになっていっ
たことばであろう。

二句の「露のゆかり」もまた、『源氏物語』以前からの定番の歌語とは言いがたい。「ゆかり」じたいは『万葉集』から詠まれ、いとおしい人への情とともにある「ゆかり」は『古今和歌六帖』（第二一―一五七）や『貫之集』（三三―三三）、『安法法師集』（六九）などにあり、『源氏物語』の若紫登場に続く場面でも「ねは見ねどあはれとぞ思ふ武蔵野の露わけわぶる草のゆかりを」（若紫巻 二五八―二五九頁）とある。また、「露のゆかり」も、侍女の右近が玉鬘のことを語るくだりで「夕顔の露の御ゆかり」（玉鬘巻 一一〇頁）とある。

しかし、歌語としてみると「露のゆかり」は『源氏物語』の時代に好まれて詠まれていたわけではなく、勅撰集の初出は『千載和歌集』までくだる。

寄源氏物語恋といへるころをよめる

みせばやなつゆのゆかりの玉かづら心にかけてしのぶけしきを
『千載和歌集』恋四 八七一

これは、『源氏物語』を念頭において詠まれた和歌である。私家集で好まれるようになるのも院政期以降である。

三句の「と思ふにも」はおよそ歌語らしい語ではなく、私家集では詞書や歌の前後に散見し、『伊勢集』一例、『馬内侍集』一例、『和泉式部続集』四例、『天齋院前御集』一例、『赤染衛門集』一例などが確認できる。和歌本文では、次のような用例が早い。

よのなかうらみけるころ、ゑ京かりいひやる
よのなかをいまはかきりとおもふにもきみこひしくやならむと
すらむ
『兼盛集』（冷泉家時雨亭叢書）二二三

女院の御めのごの小輔の内侍にもいふひとに、ひごのかみまたか物いふとききて、さぞあるといへば、女はいみじうあらがひしを、さられてまかでたるに、せりのなきをやる
水ふかみなかくせりとおもふにもまづあらはるるねにこそあり
けれ
『実方集』（書陵部本五〇一・一八三）二〇九

なにははらへしにある女まかりたりけるに、もとしたしく侍りけるをとこのあしをかりてあやしきさまになりてみちにあひて侍りけるに、さりげなくてとしころはえあはざりつる事などいひつかはしたりければ、をとこのよみ侍りける

君なくてあしかりけりと思ふにもいとどなにはの浦ぞすみうき
『拾遺和歌集』雑下 五四〇
『大和物語』一四八段

「と思ふにも」という言い方じたい散文的であつたらうことは想

像に難くない。『兼盛集』は諸本に異同がある部分で、『拾遺和歌集』の和歌は、『大和物語』にも収められており、知られた和歌であったと推測されるが、一方で、ひとつの自立した歌語とは言いがたい。そのなかで、次のような用例が見出せるのは、興味深い。

ひさしくおとづれぬ人をおもひいでたるをり

わするるはうき世のつねとおもふにも身をやるかたのなきぞわびぬる

『紫式部集』七八

しりたる男の、女の仮借けさうするに、えあふまじき気色をみて、いみじうなげきて、思ひやみなむとおもふに、やまねばわぶるに

かくながらやむべきなかとおもふにもあやなく我ぞ心ぐるしき

『和泉式部続集』五五五

『源氏物語』周辺の女性歌集で「と思ふにも」を和歌に詠みこむ平安時代中期の女性たちがおり、紫式部もその一人であった。

こうしてたどりみると、藤壺の和歌は、上の句がいずれも『源氏物語』の時代に歌語として受けとめられていた語ではない。むしろ、定番の歌語ではないことばを繋ぐことよって詠み出されている。そして、この上の句が「なほうとまれぬ」を導く。前述のとおり、「なほうとまれぬ」は、『古今和歌集』に詠まれ、『伊勢物語』でも広く

知られる和歌のことばである。

(題しらず)

(よみ人しらず)

ほととぎすながなくさとのあまたあれば猶うとまれぬ思ふものから

『古今和歌集』夏歌 一四七

『伊勢物語』四十三段

『業平集』一九

『猿丸集』三五

題しらず

よみ人しらず

おもへども猶うとまれぬ春霞かからぬ山もあらじとおもへば

『古今和歌集』雑体 一〇三二

両歌ともに「題しらず」「よみ人しらず」で、『古今和歌集』一四七番歌は「汝が鳴く里」すなわちあなたが懸想する先がたくさんあるのどと言い、相手の多情を怨む歌。『伊勢物語』ではほととぎすの絵に添えて複数の男が懸想する女性に贈った歌となっている。一〇三二番歌は「霞」が恋慕を意味し、浮気な恋心をいやだと詠む。いずれも、完了の意味になる。私家集でも知られた「なほうとまれぬ」は、広く人口に膾炙した表現に他ならない。藤壺の和歌は、四句に至り、がらりとことばの印象が変わる。ここで、『源氏物語』の時代に教養でさえあった和歌表現を用いる。

一首を結ぶ五句「なでしこ」は、『万葉集』の時代から詠まれてきた歌語であるが、「やまとなでしこ」に限定してみると、『寛平御時后宮歌合』で詠まれた素性の和歌が早く、これは『古今和歌集』にも入集する。

（寛平御時きさいの宮の歌合のうた）

素性法師

我のみややはれとおもはむきりぎりすなくゆふかげのやまとな
でしこ

『古今和歌集』秋歌上 二四四

『寛平御時后宮歌合』八〇 左 素性

『素性集』五

『古今和歌六帖』第六 三六二四 そせい

有名な歌合の和歌として知られ『古今和歌集』に入集した一首は、やはり広く享受され、宮廷社会の教養であったことがうかがえる。「やまとなでしこ」は、歌語としての定着度が高い。もつとも、これは夕日に照らされた秋の景物としての「やまとなでしこ」の花で、人に対するいとおしい情を表すものではない。すでに『万葉集』の大伴家持の和歌などに恋愛対象になずらえる和歌があり、『古今和歌集』恋の部には、いとおしい女性になずらえるもう一例もある。

あなこひし今も見てしか山がつかきほにさける山となでしこ

『古今和歌集』恋四 六九五（よみ人しらず）

これは、「やまとなでしこ」にいとおしい女性をなぞらえるよみ人しらず歌であり、恋愛対象への愛情を表すのは歌語「やまとなでしこ」の担うひとつの傾向である。

さらに、平安時代には撫でしこ^①といとおしい子の意味で詠まれるようにもなる。「なでしこの花」で子の意味を表す例が『後拾遺和歌集』（哀傷・五六九 上東門院）、『新古今和歌集』（雑上・一四九四 恵子女王）、また「なでしこ」としても『和泉式部統集』（三七二）など^②にあり、少し時期が遅れて「撫子」の表記に導かれた「子」の意味が生じてくるようである。

『源氏物語』では「やまとなでしこ」「なでしこ」で明らかに「子」を表す用例が葵巻や帚木巻・常夏巻にあり、誕生したばかりの皇子をめぐる紅葉賀巻のこの場面^③でいとおしい子の意味があるのは明らかである。「やまとなでしこ」に「子」の意味合いを響かせるのは、より同時代的な印象も与えていよう。

このように、下の句「なほうとまれぬ」「やまとなでしこ」は、いずれも和歌の伝統のうえにあり人口に膾炙したことはである。『古今和歌集』や『伊勢物語』の浸透する『源氏物語』の時代であれば、おのずと疎まれてしまうという完了の意味合いがせり出し、より時代的に近づく印象をも付与しながら愛する対象に繋がる。四句と五句の相反するような内容が、歌語の伝統を介して結び合い、そこに藤壺独自の苦衷が浮かび上がる。

それは、青海波を舞う光源氏の麗姿に「おほけなき心のなからましかば」と反実仮想の表現によって表された藤壺の心情にも通じて

いよう。

では、その理由は何かと顧みるとき、上の句の「袖ぬるる露のゆかりと思ふにも」に立ち戻る。これも解釈の分かれるところではあるが、光源氏の和歌から率直にたどれば、常夏の花をみての「露けさまざるまでしこの花」を受けて、あなたの袖をぬらす露¹¹涙のゆかりと思うにつけても、の意となろう。光源氏のゆかりと思うゆえにという理由は熟した歌語と一線を画す語を紡いで示され、宿世としか言いようのない藤壺の苦衷は人口に膾炙した歌語の取り合わせに託される。

光源氏の詠み返す紅葉賀巻の重要な一首は、巧みに選びとられたことばによって構成されている。一語一語の印象を掬い上げて本文を紡ぐその巧みさこそ、早くから『源氏物語』が人々の心を魅了してきた所以に他なるまい。光彩を放つ物語本文のことばを、さらに考え続けていきたい。

注

- (1) 『源氏物語』本文の引用はすべて新編日本古典文学全集（小学館）による。
- (2) 「人笑はれ」「人笑へ」については、大森純子「源氏物語「人笑へ」考」「名古屋大学国語国文学」（平成三年十二月）、原岡文子「浮舟物語と人笑へ」『国文学』（平成五年十月、のちに『源氏物語の人物と表現』二〇〇二年）、山本利達「人笑へ」と「人笑はれ」『むらさき』（平成七年十二月、鈴木日出男「人」「世」「人笑へ」『源氏物語の文章表現』（至文堂 平成九年）など。
- (3) 拙稿「藤壺の心とことば——『源氏物語』紅葉賀巻の出産場面から——」『源氏物語 煌めくことばの世界』（翰林書房 二〇一四年四月）。

- (4) 近年の注釈書では玉上琢彌『源氏物語評釈』（角川書店）が打ち消し説をとる。

- (5) 当該場面の藤壺の和歌をめぐる論考は多いが、いくつかをあげれば打ち消し説をとるものに吉見健夫「紅葉賀巻の藤壺 贈答歌の解釈から——『中古文学論攷』（平成八年十二月）、山崎和子（「露」の縁の（なでしこ）の花—源氏と藤壺の贈答歌解釈——『法政大学大学院紀要』（二〇〇八年三月）、完了説をとるものには鈴木宏子「藤壺宮の流儀——袖ぬるる露のゆかりと思ふにも——」「王朝和歌の想像力—古今集と源氏物語」（笠間書院 二〇一二年）、工藤重矩「紅葉賀巻「袖ぬるる」の和歌解釈—文法と和歌構文——『源氏物語の婚姻と和歌解釈』（風間書房 二〇〇九年）、両説をかけるものに徳岡涼「紅葉賀巻の藤壺詠について——『国語国文学研究』（二〇〇三年三月）などがある。

- (6) 『源氏物語』以外の和歌の引用は原則として新編国歌大観（角川書店）により、必要に応じ新編私家集大成（古典ライブラリー）によった部分がある。

- (7) 『更級日記』の引用は新編日本古典文学全集（小学館）による。

- (8) 注（5）掲載山崎和子氏文献。

- (9) 私家集大成『伊勢集Ⅱ』（島田良二蔵）による。

- (10) 「子」の意味を表す「なでしこ」が詠まれる次のような和歌がある。

一条院うせさせたまひてのちなでしこはなのへはりけるを後一条院をさなくおはしましてなにこころもしらでとらせたまひければおほしいづることやありけん
上東門院

みるままにつゆぞこぼるるおくれにしこころもしらぬなでしこの花
『後拾遺和歌集』哀傷・五六九

贈皇太后宮にそひて、春宮にさぶらひける時、少将義孝ひさしくまゐらざりけるに、なでしこの花につけてつかはしける
恵子女王

よそへつつ見れどつゆだになくさまずいかにかすべきなでしこの花

『新古今和歌集』雑歌上 一四九四

藤壺の和歌は、恵子女王の和歌に似通う。

「なでしこ」で「子」を表す次の用例もある。

ほかなるこの、なでしこのたねすこしたまへといひたる、やるとて

なでしこの恋しきときはみるものをいかにせよとかたねをこふらん

『和泉式部統集』三七二

(11) 旧注では、なでしこ＝若宮として藤壺によそえる解釈がなされ、新注では

なでしこを若宮によそえる解釈が出される。この部分については注(5)掲

載鈴木宏子氏文献に詳細な整理がある。